

特に花押部分は花押を書くことを想定して、調整しているようにも思われる。また、貫通する穿孔が四ヵ所、さらに裏には、貫通していないが二ヵ所の穿孔がある。これらの穿孔は文字を切つており、

二次的なものであろう。表の文字は三行以上にわたり、二行目は片仮名で「□□□ベシ」とも読める。三行目の年号ははつきりとしないが、一文字目は「正」かと思われ、三文字目を五年（あるいは丑年）とした場合、他の出土遺物の時期などから正応五年（一二九五）、正和丑年（一三一三）、正和五年（一三一六）の三つの候補をあげることができると、確定はできない。裏の花押は荘官クラスの人物のものと思われ、比較的整ったものであるという。本木簡は、石井進「中世木簡の一形態」（本誌第一〇号）などに紹介されている、新潟県馬場屋敷遺跡出土の山札・茅札に、形状・書式・時期などが類似している。本木簡も山札・茅札の類の可能性があろう。

木簡の釦文及び花押については、富山大学の富田正弘氏のご教示をいただいた。

9 関係文献

（財）富山県文化振興財團埋蔵文化財調査事務所『埋蔵文化財調査概要—平成一〇年度』（一九九九年）

同『埋蔵文化財調査概要—平成一一年度』（二〇〇〇年）

野口雅美「道場I遺跡出土の井戸祭祀に関わる遺物」（『富山考古学研究』一一 一九九九年）

（三島道子）

新潟・竹直神社遺跡 たけなおじんじゃ

所在地 新潟県中頸城郡吉川町大字竹直字南浦

調査期間 一九九七年（平9）四月～五月

発掘機関 吉川町教育委員会

調査担当者 新保誠吾

遺跡の種類 遺物散布地、自然流路跡

遺跡の年代 九世紀中頃～一〇世紀中頃、一四世紀～一五世紀

7 遺跡及び木簡出土遺構の概要

遺跡は新潟県の南西部、吉川町の西方、直線的な海岸と東頸城丘陵との間に形成された沖積平野とそれに接する原之町台地の縁辺部

に位置する。付近の沖積地

には同時代の古代・中世の

遺跡が多く確認され、新保

遺跡（木炭櫛木棺墓に伴う須

恵器壺底部に「石神」の墨書

あり）・江島神社遺跡（一五世紀の土壙・堀を伴う館跡）

なども発掘調査されている。本調査は、国営農地再編



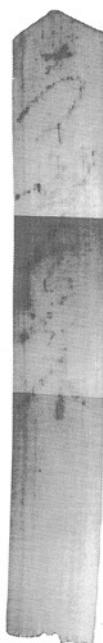
パイロット事業に伴うものである。調査対象地は水田部に広がるが、計画水路部分を調査区として設定し、神社周辺の約九五〇m²を調査した。

9

関係文献

なお、本木簡の判読・赤外線写真撮影にあたっては新潟大学の小林昌一氏にご教示ならびにご協力いただいた。

吉川町教育委員会『竹直神社・竹直下片北部遺跡発掘調査報告書』（一九九九年）
(新保誠吾)



(赤外線画像)

本調査で検出された主な遺構は、ピット二基、土坑四基と自然流路のみであるが、遺構に伴う遺物はなく所属年代も不明である。遺物は調査区東側の腐植土層あるいは自然流路からの出土がほぼ全てを占める状況である。

文字資料は、調査区全体から墨書き土器一五点（「一」「大」「の」「へ」「木山」「大野」など）、漆書き土器一点（「大」）、線刻土器七点（「十」「一」など）と木簡一点が出土している。また、斎串とも考えられる木製品（長さ（一九六）mm幅三四mm厚さ三mm）が自然流路から出土しているが、墨痕は確認できない。

今回報告する木簡は、幅約一一mm深さ一mmの自然流路から出土したものである。この自然流路からは縄文土器・石器や、中世の土師質土器・珠洲焼などが混在して出土している。

8 木簡の釈文・内容

(1) 「南無大日如来
(205)×30×2.5 019

長方形の材の上端を尖らせ、下端は欠損しているもので、両面とも調整は丁寧にされている。墨書きは表面のみで、墨痕は薄く不鮮明なものである。